「Nagoya Linguistics（名古屋言語研究）」
2023 Vol.17, pp.72(1)-61(12)
10.18999/nagl.17.72(1)

印刷を契機とするかな字体選択の変化 ― 〈ス〉の場合 ―

坂上　優太　（名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程日本語学分野・専門）

要旨

〈ス〉のかなは、【寸】、【春】、【須】の三字源が通時的に広く文献に現れる。先行研究では、平安鎌倉期の文献から【須】の非語頭・打消助動詞偏用が指摘され、室町時代に【須】の出現が稀となること、近世整板印刷資料において、再び【須】の出現が増加し、打消助動詞や非語句頭に偏ることが確かめられていたが、近世整板印刷資料で再び出現数が増加する理由は確かめられてこなかった。本稿では、室町時代の書写資料、近世初頭の古活字版および整板印刷資料を対象に、〈ス〉のかな字体運用の実態を調査した。その結果、【須】のかなの出現数増加のタイミングが、古活字版に見られることを指摘した。この現象は整板印刷資料へと連続していくが、印刷を契機として「読む」ためのテキストが考慮され、表記上の工夫が生じえたと捉えられる点を指摘した。

一　はじめに

かな表記史研究において、同じ音価をあらわすかな字体が、出現位置や語に応じた書き分けが見られることが報告されてきた。この実態は、「書かれた」資料からも「刷られた」資料からも観察され、しばしば表記史研究の俎上にのせられてきた。本稿で扱う〈ス〉一も、それをあらわすかな字体の出現傾向が指摘されてきたものの一つである。〈ス〉をあらわすかなとしては、【寸】、【春】、【須】を字源とするものが通時的に広く文献にあらわれる。このかなに関する字体選択について、古くは、藤原為房妻書状二や藤原定家筆写資料等三から【須】の非語頭・打消助動詞偏用が指摘されている。さらに、近世整板印刷資料四においても、【須】の非語頭・打消助動詞偏用が指摘され、特に【須】の打消助動詞偏用は、坂康尊（二〇一六）が広く文学テキスト五にみられる現象であることを指摘している。

平安鎌倉時代の一部の書写資料および近世整板印刷資料において、【須】の書き分けが報告されるが、両者の間には大きな時間的距離があり、直接の影響関係にあったとは考えにくい。整板本は、板下書きを直接彫ったものであるが、同一テキストを大量に複製できるメディアであり、一回性のメディアである写本とは別の視座を用意する必要もあろう。本稿では、読書のためのテキストにおけるかな字体選択の変化を探る。印刷をメディア交替の分岐点と捉え、近世整板印刷資料が【須】を非語頭および打消助動詞に偏用した経緯を明らかにすることを試みる。

漢字かな交じり表記体の印刷との邂逅は、室町時代末期のキリシタン版や近世初頭の古活字版に遡る。これを機に、保存され得る漢字かな交じり表記体は、従来までの「手で書かれた」資料と「印刷された」ものの二つの媒体が存在することになった。かな表記史研究は、かな字体相互の運用法について、「書写資料」、「印刷資料」の両方の事実を断片的に把握してきた。しかし、個別のかなの事情であっても、用法の実態を通媒体的に調査した例は少なく、手書き資料と印刷資料との間の連関への説明は十分とはいえない。近世の実態にかかわるこの分野の報告も、整板印刷資料の調査が積極的に進められてきた一方で、

それに先立つ古活字版の表記実態が詳細に調査されてきたとはいえない。近世期の文運の興隆と人々の知識基盤を下支えしたものは、整板印刷に代表される印刷技術だったであろう。冨士昭雄（二〇〇一）が指摘するように、出版部数が技術的に限られた古活字版では、庶民の購読欲求にこたえきれなかったために、板木さえあれば何度も板を重ねられる整板印刷へと移行したとすれば、購読者は古活字版によるテキストを受容し、読書のためのテキストとしてそれらを利用していたのであろう。こうした理由から、隆盛期こそ短いが、「手書きから印刷へ」というメディア変遷の橋渡しとなった媒体である古活字版の実態を個別の具体例から見ていく。かな字体選択にかかる書写文献と印刷資料との間の連関を見てみよう。

二　室町時代における〈ス〉の諸相

印刷資料における実態を見るにあたり、印刷導入前夜の書写資料における状況を確認しよう。この時代のかな表記にかかる実態は、例えば『新撰仮名文字遣[六]』に「かしらにかゝさるかな」、「下にかゝさるかな」の記述がみられる。このことから、この時期に出現位置による書き分けの実態ないし、その意識があったことが推察されるが、同書には〈ス〉にかかわる記述は見えない。〈ス〉にかかわる実態を見てみよう。

二―一　先行研究

この期に書かれた文学テキストにおけるかな字体運用については、表章・後藤ゆう子（一九八〇、一九八一）で、室町時代書写の文学的テキスト[七]のかな字体運用が稠密に調査された。表・後藤の調査結果から〈ス〉の実態を左表で確認する。表から、【寸】および【春】が頻用される字体で、【須】は出現頻度が低い字体であることがわかる。岩井田満（一九七八）では、中世末から近世初頭にかけての奈良絵本[八]における状況が調査され、そこでも【須】の出現頻度は低く、岩井田の調査範囲における〈ス〉の約４％であるという。

また、今野（二〇〇一）は、荒木田守武『守武千句』を対象に、出現位置によるかな字体の使い分けを報告するが、【須】の出現は確認できない。

計	須	寿	春	寸	
101	0	0	36	65	宗節
45	8	0	18	19	桐壺
181	3	0	21	157	正徹
63	1	1	11	50	禅竹
184	0	0	125	59	世阿弥
259	12	3	76	168	花鏡
3	2	0	0	1	六義
264	4	0	154	106	花伝
73	1	0	42	30	至花
1173	31	4	483	655	計

表１　表・後藤（1980:25）より引用。
体裁は稿者が改めた。

二―二　調査資料

本稿では、室町時代の文字資料から、伝東常縁筆『徒然草』と、慶長二年書写『狭衣の中将』をとりあげる。前者は、東常縁を伝承筆写とする『徒然草』で、吉田幸一（一九五九）は、「書写年代は文明年間から、降っても大永頃（85頁）」と推定する。東常縁が伝承筆写と目される以上、書写者は和歌や文学について一家言を有し、かなり高いリテラシーを有したと推測できる。後者は、慶長二（一五九七）年書写の奥書をもつ書写年代の判然とした資料である。この資料については、建石美砂（一九八八）や鄭炫赫（二〇一五）などが、その

表記実態を報告しており、本文中の漢字のみならず、場合によってはかなにもふりがなが施される特徴を持つ。このことから、リテラシーレベルがさほど高くない初学者なども読者として想定された可能性が指摘できる。本稿では本行にあらわれるかな字体を調査対象として扱う。調査範囲と調査に用いた資料は以下の通りである。

・東常縁本『徒然草』上巻　一丁オ～二〇丁ウ　早稲田大学図書館蔵本
・『狭衣の中将』一丁オ～二〇丁ウ　慶應義塾図書館蔵本

二―三　分類法

個々の文献での用例観察に入る前に、本稿における分類の基準を示す。まず、調査資料中に現れる〈ス〉を出現位置と語に応じて、それぞれ「頭」、「中」、「末」、「打消」に分ける。そのうち、「すべて」のような語頭に出現する〈ス〉と、「なげすて」のような複合語の形態素頭やサ変動詞が文中に出現する場合を「頭」とする。なお、「こずゑ」等の漢字一字表記が可能な語についても形態素に分けて分析した。また、「やすき」や「たすけ」のような単純語中の場合や、「おはする」のように活用によって語中となる場合を「中」に分類する。「んず」の活用形もここに分類する。さらに、「なす」のような語末での出現や、サ変動詞で文終止する場合および、「ぬす人」のように複合語の形態素末に出現するものを「末」とする。「打消」には、「ず」で文終止する場合のほか、「ずして」、「ずは」などの文節中の出現例も全て含めた。

三　調査結果

三―一　常縁本『徒然草』

常縁本『徒然草』では、【寸】、【春】、【須】の三字源が出現した。【寸】の実態から見る。【寸】は、四三例出現し、頭に九例、中に四例、末に一一例、打消助動詞に一九例出現した。【春】は、六二例出現し、頭に三九例、中に一二例、末に五例、打消助動詞に六例出現した。【須】は頭に一例、打消助動詞に一例出現したのみであった。実態を簡単な表で示す。

常縁本	寸	春	須	計
頭	9	39	1	49
中	4	12	0	16
末	11	5	0	16
打消	19	6	1	26
計	43	62	2	107

表２　常縁本『徒然草』

三―二　『狭衣の中将』

次いで『狭衣の中将』の実態を見る。常縁本『徒然草』同様、【寸】、【春】、【須】の三字源の〈ス〉が見られた。【寸】は、一三例出現し、頭に一例、中に三例、末に五例、打消助動詞に四例であった。【春】は、八三例出現し、頭に三六例、中に一四例、末に一八例、打消助動詞に一五例であった。【須】は、末に一例のみ見られた。実態を簡単な表で示す。

さごろも	寸	春	須	計
頭	1	36	0	37
中	3	14	0	17
末	5	18	1	24
打消	4	15	0	19
計	13	83	1	97

表 3　『狭衣の中将』

三―三　まとめ

室町時代写本における〈ス〉の出現実態は、おおよそ次のようにまとめられよう。

① 【春】が頻用字体で出現位置の別なく広く用いられる。

② 【須】は出現が稀で、出現位置に応じて使い分ける状況にない。

先行研究において言及されてきた点と重なる結果が得られた。室町時代後期の書写資料は近世へと直接接続する時期であるが、整板印刷資料に関する先行研究で指摘される【須】の末および打消助動詞偏用の実態は観察できなかった。

四　古活字版における〈ス〉の諸相

続いて古活字版における〈ス〉の実態を見る。古活字版は、書写が文学テキストの享受や伝播の唯一の手段であった時代と、近世の商業出版隆盛の時代をつなぐ媒体である。漢字かな交じり表記体の印刷は、イエズス会宣教師によるキリシタン文献にはじまり、その後国内においても古活字による印刷が興り、漢字かな交じり表記体の印刷が始まるが、国内の古活字版の表記実態の詳細に迫った研究は少ない。

漢字かな交じり表記体が、印刷を受容するにあたって、初めから印刷に適応した書式が用意されていたはずはなく、手書きの中で培われた国語表記のシステムがまずもって参照されたことは、鈴木広光（二〇一五）が指摘する通りであろう。古活字版の版面は、彫刻による木活字で表されるが、活字と文字の関係はひとまず措き、紙面にみえる表記実態の観察から室町時代の書写文献との関係性を探りたい。

四―一　調査資料

本稿で調査対象としたのは、以下の資料である。調査範囲は特に明記しない限り冒頭二〇丁を対象とした。調査にあたっては、『源氏物語』や『徒然草』のように、当時にあって既に古典文学作品として確固たる地位を築いていたと思しいテキストではなく、室町時代物語や仮名草子といった当時に創作・刊行されたテキストを用いた[九]。

・『目無草・水鏡・二人比丘尼』（慶長頃古活字版[一〇]）大東急記念文庫蔵本。調査範囲は七丁オ～二〇丁ウ（一丁オ～三丁ウが「目無草」、四丁オ～六丁ウ五行目までが「水鏡」。本稿では「二人比丘尼」のみを調査対象とした。）

・『弁慶物語』（慶長頃古活字版）大東急記念文庫蔵本

・『大坂物語』（慶長二〇年推定古活字版）大東急記念文庫蔵本

・『花鳥風月』（慶長元和頃古活字版）国立国会図書館蔵本

・『秋の夜長物語』（元和年間頃古活字版　国立国会図書館蔵本

・『女訓抄』（寛永一六年刊古活字版）大東急記念文庫蔵本。調査範囲は一丁オ～一五丁ウ

・『鴉鷺合戦物語』（寛永年間古活字版）国立国会図書館蔵本

四―二　調査結果

古活字版における〈ス〉の出現状況を見る。それぞれの資料における出現数を表に示す。観察された実態から、まず指摘できるのは【須】の用法の変化である。室町物語および仮名草子の古活字版における【須】は、元和・寛永年間以降の刊行と目される資料で出現が増え[二]、慶長年間頃の刊行と目される資料では、出現しない、もしくは出現が稀であることがわかる。元和以降の刊行とされる資料における【須】は、末や打消助動詞に多く用いられる傾向を見せるが、絶対的なものではない。先行研究は、近世整板本における【須】の語末・打消助動詞偏用を指摘しており、元和・寛永期の古活字版に見られる現象と接続しているように見える。この期の古活字版が新たな用法獲得の契機となりえた理由に迫りたい。

古活字版の活字については、慶長年間と、元和年間以降との間に乖離があるとする見方がある。川瀬一馬（一九六七）は、慶長年間の古活字版のかな活字を、「頗る闊達で、特に版下書きの形式に捉はれてゐない（643頁）」とし、「元和を経て寛永年間に至ると、（中略）次第に書風が硬化し、雅致を失った版下書きの書風に堕して行った。（643頁）」と述べる。さらに鈴木広光（二〇一五）は、川瀬の指摘を受けて、この時代の資料について、手書きの一回性を離れた「独自の書体・書風を獲得しつつあった（108頁）」と指摘する。先行研究から、古活字版が独自の「読まれる」ための表記スタイルを獲得しつつあった時期をこの期と見なせば、変化の時期としても想定できる。版行のための文字・表記のあり方が確立されゆく過程の中の一現象として、末および打消助動詞に【須】を頻用するようになったとも考えられる。

総計	須					春					寸					かな字体
	小計	打消	末	中	頭	小計	打消	末	中	頭	小計	打消	末	中	頭	出現位置
90	1	0	1	0	0	43	22	14	2	6	46	17	3	2	24	比丘尼
103	2	1	1	0	0	45	11	4	7	22	56	14	4	2	36	弁慶
116	3	3	0	0	0	53	10	17	2	24	60	10	10	5	35	大坂
68	0	0	0	0	0	54	3	14	14	23	14	2	6	3	3	花鳥
141	38	19	8	7	4	51	12	16	4	19	52	10	3	11	28	秋夜長
167	87	46	30	3	8	58	3	9	10	36	22	7	5	0	10	女訓抄
141	40	27	9	2	2	82	18	24	12	28	19	2	7	3	7	鴉鷺
826	171	96	49	12	14	386	79	98	51	158	269	62	38	26	143	計

表４　古活字版における〈ス〉の実態

五　整板印刷における〈ス〉の諸相

整板印刷については先行研究によって大枠が示されているが、その大枠を跡づけるために、簡単に見ておきたい。用例調査は以下の文献の本行で行った。

・『可笑記』（寛永一九年刊　一丁オ～一六丁ウ）
・『伊曽保物語』（万治二年刊　上巻）
・『好色一代男（大坂版）』（天和二年刊　巻一）
・『好色一代男（江戸版）』（貞享元年刊　巻一）
・『雨月物語』（安永五年刊　巻一）

調査資料から得られた〈ス〉の出現実態は、表の通りである。【寸】、【春】【須】が広く文献に現れ、特に【須】については、先行研究でも指摘されるように、末および打消助動詞に偏ることが確認できる。古活字版では、末および打消助動詞に多く用いられる傾向があるとはいえ、整板本ほどの峻別は見られない。【寸】や【春】が出現位置の制約をほとんど持たない点については、室町時代の書写資料から古活字版、整板印刷に至るまで相通することがわかる。『好色一代男』の【壽】については、坂（二〇一六）でも【須】と同様の傾向が大坂版で確認されていた。なお、江戸版では【壽】の出現数が大きく減少することがわかる[二]。

総計	壽					須					春					寸					かな字体
	小計	打消	末	中	頭	小計	打消	末	中	頭	小計	打消	末	中	頭	小計	打消	末	中	頭	出現位置
120	0	0	0	0	0	37	22	13	2	0	71	14	9	10	38	12	1	2	1	8	可笑記
145	0	0	0	0	0	57	32	24	1	0	86	31	18	7	30	2	0	1	0	1	伊曽保
105	17	12	5	0	0	22	19	3	0	0	48	5	9	8	26	18	0	5	5	8	一代坂
142	2	2	0	0	0	34	27	6	1	0	72	4	15	13	40	34	2	6	7	19	一代江
126	0	0	0	0	0	36	33	3	0	0	59	16	16	5	14	31	1	9	7	14	雨月
638	19	14	5	0	0	186	133	49	4	0	336	70	67	43	148	97	4	23	20	50	計

表 5　整板本における〈ス〉の実態

六　おわりに

本稿では、印刷前後の〈ス〉のかな字体運用を観察してきた。本稿で明らかになったことをまとめれば、およそ次の通りである。

① 室町時代書写資料、古活字版、整板印刷資料を通じて、【寸】【春】【須】の三字源が広く文献に現れる。

② 【春】が全ての媒体を通じて広く用いられる字体で、出現位置にも特段の制約がない。

③ 室町時代の書写資料における【須】は、本稿の調査対象資料においても稀であった。

④ 元和から寛永年間頃の刊行と目される古活字版から【須】の出現頻度が高まるが、その実態は整板印刷資料に見える傾向より穏やかであった。

この時期の〈ス〉を表すかなの中で、最も大きな変化を蒙ったのが【須】であろう。室町時代の書写資料においては、比較的出現数の少ないかなであったのが、元和から寛永にかけての刊行と目される古活字版および、整板印刷資料には豊富に出現するようになる。さらに、その出現は、非語頭および打消助動詞に偏り、特に整板印刷資料において顕著に見られる。室町時代の書写資料において、その出現が非常に稀であった【須】が、印刷以降の媒体で再びその出現頻度が高まる理由は奈辺に求められるであろうか。

古活字版と整板印刷資料は、印刷された資料である点で相通する。その一方で、整板印刷は、板下書きを彫ったものであるから、書かれたものをそのまま印刷しているようにも見える。しかしながら、〈ス〉のかな字体の運用法は、古活字版と相通する。ここで考えたいのは、「読む」ためのテキストとしての印刷資料のありかたである。書写本は、同時に同一のテキストを複数作成することができない。古活字版にせよ、整板印刷にせよ、同時に同一のテキストを量産できる点が媒体上の特徴として最も写本と異なるところであろう。元和・寛永ごろの古活字版が、手書きの一回性を離れ、「独自の書体・書風を獲得しつつあった（108頁）」（鈴木　二〇一五）とすれば、「読む」ためのテキストとしての表記のありかたの工夫が生じることも考えられ、その中の一つとして【須】の末・打消助動詞偏用の発生も捉えられうる。

七　今後の課題

本稿では、〈ス〉のかな字体選択の変化を捕捉しようとしてきたが、これは個別の事例の調査に過ぎない。しかし、それぞれのかなによって頻用されるかな字体の種類数も異なれば、一音節助辞の有無、いわゆる仮名遣の影響の有無など、それぞれのかなが持つ個別の事情を勘案しながら進める必要があろう。その中で調査範囲を拡大していく作業が求められる。

また、整板印刷資料は、古活字版から続く読書テキストの系譜上にあり、その表記面でも古活字版からの影響を受けた可能性があることを述べた。しかしながら、整板印刷資料は、板下の手書きを彫ったものである事実は覆しえない。例えば、大内田貞郎（二〇〇九）は、古活字版を漢字かな交じり表記体の印刷を始めて許容するに至らしめたものであることを評価しつつ、「江戸時代には尚、「書物」の制作過程にあって、「印刷」と並列に「書写」行為は未だに実用の具としてあった（64頁）」ことも指摘する。本稿では、近世写本を調査の対象としていない。印刷の論理と書写の論理が互いに影響を及ぼしあったことも予想できるが、この現象の観察には別の視座を用意する必要があろう。全て今後の課題である。

註一　文献にあらわれるかなそのものを示す場合は、〈　〉にカタカナで示し、かな字体の別を示す場合、【　】に字源となる漢字を示した。

註二　加藤良徳（二〇〇三）、矢田勉（二〇一二）に指摘がある。

註三　定家資料については、植喜代子（一九七九）、小松英雄（二〇〇六）、加藤（一九九八）が定家の表記実態を観察し、【須】が語末、文末、行末、非文節頭に偏る実態を指摘する。また、伊坂淳一（一九八八a、一九八八b、一九九〇、一九九一、一九九二）は、藤原俊成のかな表記実態を観察したが、ここでも【須】は非語頭の文字として出現すると指摘される。

註四　整板印刷資料におけるかな字体の使い方は、仮名草子、草双紙、洒落本、読本などの実態が報告されてきた。〈ス〉の運用に限って簡単にまとめれば、【須】の非語頭・打消助動詞偏用が、矢野準（一九九〇）、久保田篤（一九九四）、市地英（二〇一三、二〇一六）などで示される。

註五　坂は、『醒睡笑』、『好色一代男大坂版』、『浮世親仁形気』、『英草子』、『雨月物語』、『東海道中膝栗毛』、『北越雪譜』を対象に所用かな字体を調査した。〈ス〉については、「おおよそ五割から六割程度（88頁）」という表現にとどまるが、【須】が打消助動詞に偏ることを指摘する。

註六　大友信一・木村晟編（一九八一）所収の、国立国会図書館蔵『新撰仮名遣』（ママ）寛文一三（一六七三）年書写本にみられる記述。同書は大友信一（一九八一）で、吉田広典によって著され、永禄九（一五六六）年には原稿ができあがっていたことが、沢庵禅師「新選仮名遣」から推定されている。

註七　表・後藤は以下の文献に調査を及ぼした。世阿弥真筆資料として、「きや状」、「花修」、「別紙」の三種のかな書文書、その他の資料として、天正十六（一五七八）年、観世宗節筆『花伝第七別紙口伝』〔観世宗家所蔵本〕、大永五（一五二五）年筆『証本源氏物語』〔日本大学図書館蔵本（三条西家伝来本）〕、永享三（一四三一）年、正徹筆『徒然草』〔静嘉堂文庫蔵本〕、文正元（一四六六）年、金春禅竹筆『六輪一露秘注』〔宝山寺蔵巻子本〕、永享九（一四三七）年、貫氏筆『花鏡』〔宝山寺蔵世阿弥伝書〕、室町末期筆『風姿花伝』〔世阿弥伝書〕、室町末期筆『至花道』〔宝山寺蔵世阿弥伝書〕を扱う。

註八　岩井田は、『天神縁起絵巻』（室町末）、『小男の草子絵巻』（室町末）、『小男の草子絵巻別本』（慶長一二年）、『鼠の草子』（室町）、『いはやものがたり』（ママ）、『花鳥風月』（室町末）、『熊野の本地』（天文よりやや下る）、『小伏見物語』（慶長を下らない）、『小おとこ』（近世初期）、『やひやうゑねずみ』（近世初期）について調査した。岩井田の調査範囲における〈ス〉の内訳は次の通りである。

計	須	春	寸	
69	6	41	22	天神
74	7	61	6	小男
12	0	6	6	小男（別本）
116	0	26	90	鼠
309	29	215	65	いはや
133	1	126	6	花鳥
138	9	25	104	熊野
355	0	290	65	小伏見
55	0	40	15	小おとこ
61	2	55	4	やひやうゑ
1322	54	885	383	計

表 6 岩井田（1978:51）より引用。
体裁は稿者が改めた。

註九　中古、中世前期頃までに成立した作品では、元となった写本における運用実態等が反映される可能性を鑑み、本稿では室町時代物語および仮名草子を調査対象に選んだ。一方、漢字かな交じり表記体が古活字版で印行されるに及んでは、古典文学作品がまず行われたことも事実であり、古典文学の写本系

統との連関等も含め、本稿とは視座を分けて改めて論じる必要があろう。

〈ス〉の事情に関わって、稿者の管見に入ったものでは、『源氏物語』、なかでも「花散里」段における諸本の表記を稠密に調査した斎藤達哉（二〇二一）に、中世後期から近世にかけての写本群においては、【須】が出現の稀なかなとは断言できない実態が報告される。このほか、慶長年間の刊行と推定される古活字版においても、『竹取物語』（国立国会図書館蔵本）や『住吉物語』（国立国会図書館蔵本）などには【須】が用いられる様子が確認できることから、本稿で調査の対象とした当代性の強い資料とは表記のありように差があった可能性も存する。むしろ古典文学の刊行が【須】の表記もふくめて、印行の表記実態に影響を及ぼし得たかどうかの検証は今後の課題である。なお、ここで示した『竹取物語』と『住吉物語』は同種の活字を持ち、類似の識語を持つことから近い関係にあったことが知られるが、このような古活字版の各系統上の連関についても今後の課題である。

註一〇　大東急記念文庫蔵本については、中村幸彦編・解題（一九七六）『大東急記念文庫善本叢刊第一巻仮名草子集』の解題に従った。国立国会図書館蔵本については、国立国会図書館デジタルコレクションにおける解題に従った。それぞれの使用資料等については、「使用資料」に一覧した。

註一一　『女訓抄』で【須】の出現がとりわけ多く見える。近世における女訓書については、徳田進（一九八四）に「最初のものとして『女訓抄』（著者未詳、寛永十四年（一六三七）古活字版）が現われ（413頁）」とあり、少なくとも『女訓抄』が近世における女訓書の類いの興りであったことが推定でき、古活字版内のジャンル差によるかな字体の用い方の傾向を見いだすことは難しい。その後の女訓書におけるかな字体選択についての考究は今後の課題であり、啓蒙的な教養志向の強い文章における実態と文学的・娯楽的性質の強い文章における実態との間には表記上の差異が生じる可能性は捨てきれないが、寛永年間の古活字版の実態として有益な情報である。

註一二　大坂版の板下は西吟によるとされ、彼の書写資料からの【壽】使用状況の調査と、同時期の作品群における【壽】の使用状況の調査が求められよう。『好色一代男』の成立についての研究は相当の蓄積を有し、本稿ではその一々を確認しないが、大坂版の板元である荒砥屋孫兵衛可心は、暉峻康隆（一九九六）に「後にも先にもこれっ切りのインスタント板元の私家版であった（5頁）」と記されるなど、専門書肆による板行ではないことが知られる。坂（二〇一六）では、板木作成の専門家でない者の手によるとすれば、かな字体の用い方に特殊性が表れる可能性も捨てきれないことが推測されている。一方で江戸版については、金井寅之助（一九八四）に「江戸版は上方版の覆刻であるが、本文の漢字を多く仮名に改めているのが特色（495頁）」とされ、【壽】の使用頻度低下もこのことと関係する可能性がある。西鶴他作品における【壽】の使用実態および西吟の書写の実態の調査を要する課題であるが、【寸】、【春】を出現位置に制約のない字体、【須】および【壽】を「末」ないし「打消助動詞」に用いることでは共通し、両字体ともにマーカとして機能したことが窺える。

使用資料

・大友信一・木村晟編（一九八一）『駒澤大学国語研究資料第三新撰仮名文字遣』汲古書院

・村井順（校）（一九六三）『つれづれ草　常縁本上巻』古典文庫（190）

・『つれつれ草　上巻』早稲田大学古典籍総合データベース（二〇二二年八月三十日閲覧）https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he10/he10_06865/index.html

・松本隆信編（一九七一）『影印室町物語　第四輯』「狭衣の中将」汲古書院

・中村幸彦編・解題（一九七六）『大東急記念文庫善本叢刊第一巻仮名草子集』「目無草・水鏡・二人比丘尼」勉誠社

・中村幸彦編・解題（一九七六）『大東急記念文庫善本叢刊第一巻仮名子集』「弁慶物語」勉誠社

・中村幸彦編・解題（一九七六）『大東急記念文庫善本叢刊第一巻仮名子集』「大坂物語」勉誠社

・『花鳥風月』国立国会図書館デジタルコレクション（二〇二二年八月三十日閲覧）DOI：10.11501/2532150

・『秋の夜長物語』国立国会図書館デジタルコレクション（二〇二二年八月三十日閲覧）DOI：10.11501/2532180

・中村幸彦編・解題（一九七六）『大東急記念文庫善本叢刊第一巻仮名子集』「女訓抄」勉誠社

・『鴉鷺合戦物語』国立国会図書館デジタルコレクション（二〇二二年八月三十日閲覧）DOI：10.11501/2544509

・田中伸・深沢秋男・小川武彦編（一九七四）『可笑記大成―影印・校異・研究―』笠間書院

・中村幸彦・日野竜夫編（一九八九）『新編稀書複製会叢書　第二巻（御伽草子・仮名草子・浮世草子・咄本）』臨川書店

・金井寅之助解説（一九八一）『近世文学資料類従　西鶴編一　好色一代男（大坂版）（天和二年刊）』勉誠社

・金井寅之助解説（一九七四）『近世文学資料類従　西鶴編一　好色一代男（江戸版）（貞享元年刊）』勉誠社

・近世文学史研究の会編（一九六八）『雨月物語　全』文化書房

・村井順（一九六七）『常縁本　徒然草　解釈と研究』桜楓社

・横山重・松本隆信編（一九七九）『室町時代物語大成　第七』「狭衣の中将」角川書店

・横山重・松本隆信編（一九八四）『室町時代物語大成　第一二』「弁慶物語」角川書店

・朝倉治彦編（一九八八）『假名草子集成　第九巻』「大坂物語」東京堂出版

・横山重・松本隆信編（一九七五）『室町時代物語大成　第三』「花鳥風月」角川書店

・横山重・松本隆信編（一九七三）『室町時代物語大成　第一』「秋の夜長物語」角川書店

・朝倉治彦編（二〇〇五）『假名草子集成　第三十七巻』「女訓抄」東京堂出版

・横山重・松本隆信編（一九七四）『室町時代物語大成　第二』「鴉鷺物語」角川書店

・朝倉治彦・深沢秋男編（一九九三）『假名草子集成　第十四巻』「可笑記」東京堂出版

・武藤禎夫校注（二〇〇〇）『万治絵入本伊曾保物語』岩波文庫

・井原西鶴作横山重校訂（一九五五）『好色一代男』岩波文庫

・中村幸彦・高田衛・中村博保校注（一九九五）『新編日本古典文学全集78英草子・西山物語・雨月物語・春雨物語』小学館

・『竹取物語』国立国会図書館デジタルコレクション（二〇二二年十一月七日閲覧）（巻一 DOI：10.11501/2544595、巻二 DOI：10.11501/2544596）

・『住吉物語』国立国会図書館デジタルコレクション（二〇二二年十一月七日閲覧）（巻一 DOI：10.11501/2569953、巻二 DOI：10.11501/2569954）

参考文献

・吉田幸一校（一九五九）『つれづれ草常縁本』古典文庫（一四九）古典文庫
・川瀬一馬（一九六七）『増補古活字版之研究』ＡＢＡＪ
・岩井田満（一九七八）「中世における仮名使用の研究 ―奈良絵本の仮名使用を中心に―」『玉藻』一四 フェリス女学院大学国文学会 三九―五三頁
・植喜代子（一九七九）「藤原定家の変体仮名の用法について」『国文学攷』八二―二四頁
・表章・後藤ゆう子（一九八〇）「世阿弥の平仮名書の用字法の特色（上）」『能楽研究』五 野上記念法政大学能楽研究所 一―九〇頁
・表章・後藤ゆう子（一九八一）「世阿弥の平仮名書の用字法の特色（下）」『能楽研究』六 野上記念法政大学能楽研究所 一―八〇頁
・大友信一（一九八一）「『新撰仮名文字遣』と表記の実態」『岡山大学文学部紀要二（文学）』岡山大学 文学部 一〇〇―八六頁
・金井寅之助（一九八四）『日本古典文学大辞典 第二巻』「好色一代男」岩波書店 四九四―四九四頁
・徳田進（一九八四）『日本古典文学大辞典 第三巻』「女訓書」岩波書店 四一三頁
・伊坂淳一（一九八八ａ）「藤原俊成の用字法試論―自筆本『広田社歌合』における機能的用字法―（一）」『学苑』五七七 昭和女子大学近代文化研究所 五九―七一頁
・伊坂淳一（一九八八ｂ）「藤原俊成の用字法試論―自筆本『広田社歌合』における機能的用字法―（二）」『学苑』五七八 昭和女子大学近代文化研究所 一七九―一八九頁
・建石美砂（一九八八）「室町時代物語「狭衣の中将」における仮名文字の使用状況」『論輯』一六 駒澤大学大学院 七五―八四頁
・伊坂淳一（一九九〇）「藤原俊成の用字法・試論（一）―昭和切本『古今和歌集』における用字法―」『千葉大学教育学部研究紀要』三八（一）千葉大学教育学部一八五―一九五頁
・矢野準（一九九〇）「一九の文字生活―蔦屋板黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に―」『近代語研究第八集』武蔵野書院 二四五―二六〇頁
・伊坂淳一（一九九一）「藤原俊成の用字法・試論（三）―顕広切本『古今和歌集』における用字法―」『千葉大学教育学部研究紀要』三九（一）千葉大学教育学部三〇―三一〇頁
・伊坂淳一（一九九二）「藤原俊成の用字法・試論（四）―日野切本『千載和歌集』における用字法―」『千葉大学教育学部研究紀要』四〇（一）千葉大学教育学部三二五―三三五頁
・久保田篤（一九九四）「仮名草子整版本における仮名の用法（上）」『茨城大学人文学部紀要人文学科論集』二七 茨城大学 一―一九頁
・暉峻康隆（一九九六）『井原西鶴集 2』（新編日本古典文学全集「古典への招待」）五―一〇頁
・近藤尚子（一九九八）「二つの『好色一代男』」『女子文化大学紀要 人文・社会科学研究』06 一―一一頁
・加藤良徳（一九九八）「藤原定家の異体仮名の用法」『国語と国文学』七六（七）東京大学国語国文学会 四四―五六頁
・富士昭雄（二〇〇一）「近世文学と出版流通機構」『江戸文学と出版メディア―近世前期小説を中心に』三―二三頁
・今野真二（二〇〇一）『仮名表記論攷』清文堂出版
・加藤良徳（二〇〇三）「藤原為房妻書状にみる実用文の書記システムと仮名文モデル」田島毓堂・丹羽一弥編『日本語論究七 語彙と文法と研究叢書二九七』和泉書院 五一七―五三四頁
・小松英雄（二〇〇六）『日本語書記史原論補訂版 新装版』笠間書院

・大内田貞郎(二〇〇九)「「きりしたん版」に「古活字版」のルーツを探る」『活字印刷の文化史―きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで―』勉誠出版　二一―六八頁
・矢田勉(二〇一二)『国語文字・表記史の研究』汲古書院
・市地英(二〇一三)「馬琴小説の平仮名字母の研究―読本と合巻の比較―」『成蹊国文』四六　成蹊大学文学部日本文学科研究室　一〇三―一一六頁
・鈴木広光(二〇一五)『日本語活字印刷史』名古屋大学出版会
・鄭炫赫(二〇一五)「慶応義塾図書館蔵『狭衣の中将』の使用仮名」『日本研究』六四韓國外國語大學校日本研究所　四九五―五一八頁
・市地英(二〇一六)「馬琴読本『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴」『成蹊国文』四九　成蹊大学文学部日本文学科研究室　一二五―一四八頁
・坂康尊(二〇一六)「江戸時代の変体仮名の字母字形の変遷と傾向―中でも『好色一代男』の特異性について―」『同朋文化』一一　同朋大学人文学会　四五―九三頁
・斎藤達哉(二〇二一)『国語仮名表記史の研究』武蔵野書院

※引用箇所の旧字体は現行の字体に改めた。

［付記］
本稿は、名古屋言語研究会第一八五回例会(二〇二一年四月二四日)での口頭発表「印刷を契機としたかな字体選択の変化―スの場合―」に基づき、加筆・修正を加えたものである。席上で頂戴した多くのご教示に、心より感謝申し上げる。